

お墓について

小嶋祥三

最近、お墓の維持が難しくなり、墓仕舞いが話題になっている。父母は都立多磨霊園に眠っているが、荒れ果てたお墓が散見される。背景には少子化などがあるのだろう。高校の友人が、兄弟は同じ墓に入らないとかで、ン百万円かけて 1 平米の小さなお墓をお寺に作ったという（50 年間は面倒を見てくれるそうだ）。兄弟が同じ墓に入らないのは、廃れつつある「家」の名残だろうか。先々を考えると、いずれお墓の維持は難しくなる可能性が高いのだから、入る人を増やし維持する人数を多くしておくべきだろう。

父は長野県の田舎の 5 男か 6 男で「家」を継ぐ立場でなかった。それゆえ、家の意識は希薄だったと思う。父はお盆には帰省していなかった。わたしは父の実家に一度しか行ったことがない。父母の墓は、母方の祖父のために父が建てた墓だ。祖父も故郷の淡路島を離れ、そこに戻る気は全くなかったようだ。祖父も父も故郷の「家」を離れ、自らの才覚で世間を渡っていったが、根なし草の意識はもっていたかもしれない。

母は父よりも先に亡くなったが、一人娘だったので、父が建てた祖父の墓（母からすれば彼女の父の墓）に眠っている。母の母は先の大戦の 1945 年 5 月 25 日の山の手大空襲で亡くなった。遺骸は見つからなかったので、お墓には和服を入れた。母は彼女の父母と一緒に眠った。その後、父が亡くなり、この墓に入った。それゆえ、このお墓は「根なし草」同士の母方と父方の「共同墓地」のようなものだ。墓石には「先祖の霊」とあり、家名はない。なお、母方には次兄が養子で入り、家を継いだ。

わたしはこの「共同墓地」という考えを拡大できたらと思っている。もう、「家」も血縁も取り払って、何らかの関係があった人たちのための共同墓地にしたらどうだろうか。配偶者やその家族で入りたい人は誰でも入れるような墓である（さらに広げても一向に構わないのだが）。したがって、お墓の維持も容易になり、ン百万円もかけてお墓を作る必要はなくなる。また、入るお墓が別にある人でも、分骨してもらえば、地下も墓誌もにぎやかになるだろう。無論、お墓を維持するための何らかの組織は必要だ。

今後、「家」はさらに希薄化し、少子化も続くかもしれない。これからの家族のあり方を考えると悪い案には思えないのだが、兄たちが賛成してくれなければ、残念ながら、実現しない。